

Title	間接的発話行為の考察について-理解・表現を中心に-
Sub Title	
Author	ウィッターヤーンヤーン, スニサー
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2001
Jtitle	三田國文 No.34 (2001. 9) ,p.56- 73
JaLC DOI	10.14991/002.20010900-0056
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20010900-0056">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20010900-0056</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 間接的発話行為の考察について

——理解・表現を中心に——

## スニサー ウイツタヤーパンヤーノン

### 1 はじめに

我々は何らかの言葉を話すことよって「話す」と言う行為以上のことをしている。例えば、ある人が「この部屋は寒いですね」と言ったら、我々はたいいてい「本当ですね」と同意しながら、あるいは「暖房をつけましょう」と言いながら、暖房をつけるだろう。もし、聞き手が「本当にこの部屋は寒いですね」と文字通りに理解して同意したとしても、暖房をつけに行ったりする行為が伴わなければ、随分気の利かない人だ思われても不思議ではないだろう。

このように、ある発話をするには、話し手が発話により、ある情報を与えているだけではなく、依頼などのある行為を行っており、聞き手に対して、ある働きかけをしているのである。つまり、「発話」は聞き手に対して、ある力(force)を持っている。話し手がある発話を行えば、聞き手はそれに応えて、反応をする。こうした行為を「発話行為」(speech act)と呼んでいる。

ここでは、話し手は「この部屋は寒いですね」と言うとき、

単に部屋の温度を述べているだけではなく、ある場面、状況では「暖房をつける」ことを依頼し、また、別の場面、状況では「暖房をつけてもよいか」という許可を得ようとしているとも考えられる。このような、事実の陳述の形をとっている発話が、依頼や許可の発話行為の働きを担っている。

このように「一つの発話行為を遂行することにより間接的にもう一つ別の発話行為が遂行されるケース」(Searle, 1975)を「間接的発話行為」(indirect speech act)と Searle が呼んでいる。ただし、「間接的発話行為」と言う術語の用法や指示範囲に関しては、必ずしも研究者間の合意が成立しているわけではないが、本稿では、Searle の定義を基づいて論じていくことにする。

このような、同一の言語表現が、異なる状況で用いられ、それぞれ違った意味合い(意図)を生み出す言語事情においては、同じ言語文化社会に属していても、発話者の意図を適切に理解し、対応・表現できるとは限らない。また、同じ発話行為を行う場合でも、言語、社会や文化が違うとさらに分かりにくい。つまり、それによってコミュニケーション・パターンが違って

くる。また、異文化間でコミュニケーション・ギャップが生じ、意図を伝えたり、理解したりすることに失敗すると、その失敗は「言語能力」が問われるというよりは態度や礼儀など相手の人間性の評価に結び付けてしまいがちであり、対人関係を摩擦を引き起こす可能性が高いのである。

このような問題を踏まえて、本稿では日本人が濫用する間接的発話行為をタイ人日本語学習者はどのように、どの程度、適切に理解しているのか、また理解していると判断できる場合、そのヒントは何か、さらに適切に理解、対応できない場合、その相手の反応や受けとめかた（発語媒介行為<sup>(2)</sup>）がどのようなものかなどの問題を明らかにし、効果的なコミュニケーションのために両言語の間接的発話行為の特徴や相違点や共通点について検討したい。

## 2 調査の方法

調査方法として、理解、対応、表現の三つの項目に分けて調査は対象者に対するアンケートによって行った。調査対象者はタイ人日本語学習者（日本在住）38人『グループ1』、タイ人日本語学習者（タイ在住）60人『グループ2』である。アンケートを作成する前に間接的発話行為を体験した人から、間接発話行為が使われる会話・場面を収集し、そのサンプルから日本人が濫用する、いわゆる日本的コミュニケーション・パターンの会話・場面、対人関係を設定した。それをもとにして日本語のアンケートを7つ設定して作成した。

A、B、C、Dの選択肢は発話者の意図や問題とする表現に

後続する発話として考えられるものを設定した。発話者の意図を理解すれば当然選択するであろうもの、発話の文字どおりの意味だけを理解した場合、選択するであろうもの、母語の影響を受けた場合、選択するであろうもの、会話全体の内容を理解できなかった場合、選択するであろうものである。

さらに、母語によるコミュニケーションの影響を確かめるために同じ場面において自分の国の場合同じように理解、対応・表現をしているかしないか母語で意見を書いてもらった。

その後、それぞれのグループから5人―10人の学習者をインタビューをし、回答を見ながら、適切に選んでいる場合、その理解のヒントや方法など、また適切に選べていない場合何が理解の妨げとなったのか、誤解したポイントなどの質問をした。

最後に、隠喩 (metaphor) や皮肉 (irony) という発話に関しても、これらの発話も、ある特定の一次的な発話行為を介し、二次的な発話行為が遂行され、他の意味が間接的に伝えられると言う意味で、間接的発話行為のグループに入っているが、本稿では、それに関しては触れないことにする。

## 3 分析の手順

アンケートの分析にあたっては、一問ずつ分析し、問題とする会話の場面・状況と会話本文をあげた後、問題とする発話行為の文字通りの解釈を施す。

まず、間接的発話行為としての発話行為の意図と機能をもとに、それぞれの会話場面・状況において間接的発話行為(発

話者の意図)を適切に理解し、対応・表現できない場合やうまく機能しない場合、その反応や結果(発語媒介行為)を分析する。

最後に、アンケートのA、B、C、Dの回答と、回答者へのインタビューを基にして、間接的発話行為における発話者の意図の理解、理解した場合の適切な対応とそれに付随する表現の三つに分けて分析する。ただし、分析していく上で、理解、対応、表現の三つが必ずしもそれぞれに分かれているとは限らず、二つの要素が混然としている場合もあるので、その場合については適宜指摘してゆくことにする。

#### 4 アンケート及びインタビューの結果と分析

##### ① 相手からのプロポーズを促す発言

「ここはイタリア料理店です。二人の男女が食事をしていきます。二人は仕事場で知り合い、お互いに好きであることを確かめて、一対一の付き合いを始め2年がたちました。」

女性：最近ね、いつまでもお茶くみ、コピーとりで走り回っていても仕方がないって思うのよね。私は今の仕事を一生つづけていこうとは思ってないし。

男性：どうしたの。何かあった？

女性：別に何もないんだけど、実家の両親も仕事もたいしたことないんだったら帰って来いってうるさいの。家へ帰ってしまおう方がいいかな……。

男性：……

★ 線を引いた女性の言った言葉をあなたがこの男性だとし

たらどのように理解しますか。

A、仕事について相談にのってほしい。

B、仕事をやめて結婚しようと言ってほしい。

C、実家に帰ることについて相談にのってほしい。

D、その他

以上の会話では文字通りに発言を追っていくと発話者である女性が平叙文の形をとって、自分の仕事に対する不満、仕事を一生続けるつもりはないという意志、また両親の態度を叙述し、さらに最後に「家へ帰ってしまうほうがいいかな」と、独り言のように2年付き合ってきた恋人に問いかける。

そして、聞き手である男性は、女性の発言を受けて、それを単なる女性の近況報告と理解した場合、「そうなんだ」のような簡単な相づちを返したり、或いは文字通りの意味を解釈した上での判断として「仕事が大変なんだ」や「帰りたければ帰ったら」のような同情や対応が考えられるが、そうした場合、女性は「私のことを愛していないのね、ただの遊び相手だけで結婚するつもりなんかなかったんでしょ、ひどい男だわ。」と怒るのではないだろうか。

二人が二年間付き合い合ってきた恋人同士であるという場面・状況を考えると、女性は自分の恋人に単に仕事の不満や両親の態度、また、家へ帰ってしまうほうがいいかという迷いを叙述しているというよりも、両親の言うとおりに家に帰ってしまった方がいいのか、自分はそうしたくないという女性の気持ちを恋人である相手の男性に伝えようとしているのであり、もうそろそろ結婚したい、早くプロポーズをしてほしいという願望や催促

の意図を間接的に伝えていると読み取ることが出来る。つまり、発話者は陳述をすることによって、願望または催促をしているのである。

表① アンケートの各選択肢の回答%

	A	
グループ1	21%	【B】
グループ2	32%	C
	20%	D
	48%	
	0%	
	8%	

ここでは、グループ2がAとCをBより、多く選んでいることは発話行為を文字通りに解釈した結果であると考えられる。つまり、女性の発言の前半部において、女性は仕事のことを話題にし、後半部において、実家のことを話題にした為、AとCの選択肢を選んだということになる。

さらに、Bの選択肢について、グループ1では最も正答率が高かったにしても50%に満たない理由として考えられるのは、タイの女性には仕事をやめて、結婚したり、実家に帰ったりする習慣はない為である。また、アンケート中の「意見」の欄にも多く見られた指摘だが、タイの女性は仕事のことを理由に結婚を促すことはしない。タイの中流家庭の多くは共働きでないと生活できないという経済的な問題をかかえており、ほとんどの女性が結婚しても仕事をつづける。従って、結婚に関しては、仕事のことよりも付き合った期間や周囲の友達との比較、両親

が勧めた場合によることが多い。

このような社会的背景の為、会話の内容を理解しても、発話者の意図を理解することができないのである。

## ② へ仕事の断り

「中山さんが大学の先輩に来年のサークルの責任者になるように頼まれました。」

先輩…今、ぼくがサークルの責任者をやっているんだけど、中山くん、どうだろう。来年私は卒業するから、君にやってもらえないかなあ。

中山…でも、来年は卒業論文もあるし、大丈夫でしょうか。

先輩…そんな大変な仕事じゃないから、論文と両立できると思うよ。

中山…そうですか。でも まだいろいろあつて……。ちよつと

考えさせて下さい。

★線を引いた中山さんが言った言葉をあなたがこの先輩だとしたら、どのように理解しますか。

A、たぶん断られる。

B、引き受けることができるようにスケジュールを調整してくれる。

C、まちがいなく引き受けてくれる。

D、その他

以上の下線の発話行為を文字通りに解釈していくと、発話者である中山(先輩)が、サークルの責任者の仕事がそんなに大変な仕事ではない、だから、論文と両立できるという先輩の意見を理解したという相づちを打った後、中止法の形で止めて結

論を保留し、相手に対する許可を求める形の平叙文をとって、自分の事情を報告してから、使役形を含む「……てください」の形をとって、自分自身が「考える」という行為について先輩の許可・承認を得ようとするのである。つまり、中山が先輩にサークルの責任者を引き受けるかどうかについて考えるための許可・承認を得ようとして、「ちょっと考えさせて下さい」と言うのである。

そして、聞き手である先輩が、中山の発話を文字通りに受けとって、「もちろん、いいですよ、いろいろ考えて下さい。どうするか決心できたら、教えて」と反応した場合、中山は断つたつもりなのに、先輩がなぜ返事を待つというような反応をしたのか分からなくなるか、或いは、先輩の反応を気にしないで、自分は断つたのだから、先輩も分かってくれただろうと思うというような反応が考えられる。そうすると、中山が断つたつもりで返事をしない場合、二人の人間関係がまずくなるということもあるのではないだろうか。

水谷修氏（一九七九）が、「我々（日本人）は常に相手の意志に従っているわけではない、都合の悪い場合もあるわけで、その場合には違った表現のしかたを工夫する」また、「たのみごとをして、『考えさせて下さい。』と言われただけだったら、それは『まあ、ダメだと思ってください』『まず無理でしょう』などの否定的な返事だと思おうほうがいいようだ」と言っているように、ここでも、中山は、先輩に「考える」という行為の許可・承認を得て、本当にこの仕事を引き受けるかどうかを考えるというよりもその場で先輩のたのみごとをはっきり断ることがで

きず、「考えさせてください。」という依頼文の形をとって、先輩に断りの意図を間接的に伝えていると読み取ることができると。つまり、発話者は依頼をすることによって、断りをしてるのである。

表② アンケートの各選択肢の回答%

		[A]	B	C	D
グループ1	74%	13%	4%	9%	
グループ2	40%	52%	8%	0%	

右の結果を見ると、日本在住経験の有無の影響が際立っていることが見られる。インタビューに際して、授業で教わったことがあり、また、テレビやラジオだけではなく、実際に下線の間接的発話行為を誤解した経験があると、グループ1の何人かが言っている。ただし、グループ2の学生を担当している先生によると、この発話行為をクラスでも取り上げているとのことであるが、これは実際の経験があるかないかの違いが大きいことが考えられる。

さらに、両方のグループともCの割合が少ないという結果については、下線部の間接発話行為が「間違いない引き受けてくれる」というプラスの反応ではないということを回答者が理解できたということを示す。

この理解に結びついたヒントはインタビューによると、傍線

の間接的発話行為文中の「でも」や中止法のあとの「…」の部分であることが分かる。

また、グループ2では、Bを最も多く選択した理由として考えられるのは、中山の意図が判断できなかったために、そのまま文字通りに解釈したということよりも、タイ語では、このような表現を使用して断ることはしないし、そのまま解釈するのが一般的なのである。アンケート中の「意見」の欄からも窺えることだが、タイ人は、相手のたのみごとに応じることができなければ、「できません」などの言葉を用いずに日本人と同じように間接的発話行為を使う。しかし、その表現は理由を説明するという方略によって、断りの意図を伝えるというものである。または、「もし、本当に遠慮して断ることができないのなら、無理に引き受ける」ように行動することもあるという意見もあった。

以上の分析を踏まえると、日本人とタイ人による異文化コミュニケーションの場では断りの意図を伝えたい時、日本語・タイ語それぞれの表現形式、表現手法が違う。さらに、日本語では「考えさせて下さい」に対する水谷修氏が指摘するような、日本人の一般的な受け取り方への理解が必要になる。

### ③ へ展覧会の誘い

「田中さん（男性）と大石さん（女性）は大学時代の友だちです。」

田中さんは今、美術関係の仕事をしています。」

田中…今度の土曜日、何かある？

大石…特に決まっていなくて、どうして？

田中…いや、大したことじゃないんだけど、展覧会があったとしても一応出品させてもらっているんだ。わざわざ出かけてきてもらうほどのものじゃないんだけど…

★ 線を引いた田中さんの言った言葉をあなたが大石さんとしたら、どのように理解しますか。

A、展覧会出品を喜んでもらいたい。

B、自信をもっと励ましてもらいたい。

C、展覧会に来てほしい。

D、その他

聞き手である大石は、田中の下線の発話行為を文字通りに受けとって、「田中が自分の展覧会出品のことを喜んでほしいから、電話してきたんだ」と理解した場合、「良かったね、すごいじゃない」のような喜びの表現を返したり、或いは、「田中が自分の作品に自信がないので、自信をもっと励ましてほしいから、電話してきたんだ」と理解した場合、「大丈夫ですよ、田中さんの作品なら、きっと素晴らしい作品だと思う。」のように、励まして対応することが考えられる。そうした場合、田中は「大石さんが展覧会に来たくないから、そんなふうにごまかしているんだ、土曜日特に予定ないって言うのに……」等のようにがっかりするのではないだろうか。

田中が会話の最初に大石の今度の土曜日の予定を尋ねているということヒントにして、さらに、日本社会において、自分に関するものなどについては低めて言い、相手に属するものなどについては高めて言う（水谷修氏、一九七九）<sup>1</sup> 日本的コミュニケーション・パターンを背景に考えると、ここでは、田中が

単に大石に自分も出品する展覧会がそんなにいいものではない、わざわざ見に来るものではないということを主張し、陳述しているというよりも、本当は、今回の展覧会に自分も出品することに誇りを持っていて、大学時代の友達である大石さんにぜひ見に来てほしいという願望または誘いの意図を間接的に伝えていと読みとることができる。つまり、発言者は陳述をすることによって、誘っているのである。

表③ アンケートの各選択肢の回答%

		A
グループ1	3%	B
	18%	【C】
グループ2	22%	D
	38%	
	40%	
	0%	

表③を見て言えるのは、グループ1もグループ2も、田中の発言の意図を適切に理解すれば、選択するであろうCを最も多く選択していることである。つまり、以上の発話行為で、いわゆる、日本的コミュニケーション・パターンは、タイでも同じように使用され、共通に理解されていると、解釈するべきであろう。しかし、Cの割合を比較してみるとグループ2は40%で、グループ1のほぼ半分になり、全体の50%に満たない。ここでは、日本在住経験の有無の影響が大きいことがわかった。また、グループ2では、Cと並んでBの「自信をもてと励ましてもらいたい」を38%、選択している。

Cには謙遜の言い方の特徴がよく表れており、以上の会話の話し手と聞き手が日本人同士であれば、その特徴は理解できるだろうが、相手がタイ人であれば、そうはいかない。なぜなら、タイ人は日本人のように事実（自分が持っている考え）と異なることを発言してまで自分を低めることはしないからである。よってBを回答した人がCを回答した人とほぼ同じ割合になったのである。タイ人は傍線部の表現で言われたら、最初に土曜日の予定を聞いてきたので、土曜日どこかへ誘ってくれるのかと思うだろうが、最後まで聞いてみると、結局誘うのか、誘わないのかわからなくなり、或いは、自分のことを低めて言うので、今回の展覧会について自信がない、励ましてほしいという発話の文字通りの意味で受けとるのである。また、アンケートの意見のところとインタビューでも、「タイ人は直接的な表現で誘う。」「タイ人なら、たいしたものではないとは言わない。」という意見が多く、また、「忙しくなかったら、僕の展覧会を見に来てほしい」「もし暇なら、見に行きませんか?」「土曜日は時間がありますか?僕も出品している展覧会と一緒に見に行きませんか。」などというふうに誘うとのことである。

これらの分析から、人を誘うとき、タイ人と日本人のコミュニケーション・パターンが違うことがわかる。日本人はどんな誘いでも自分のために相手に時間を割かせると考える。一方、タイ人は上記のアンケートで設定した程度の誘いであれば、相手に時間を割かせるといふ負担を感じないのである。グループ1もグループ2もCの割合が最も高かった。そこで、その理解のし方やヒントをインタビューで聞いてみた。ほとんどの人が、

今度の土曜日の予定を尋ねるといふ兩國の共通の誘いの前置きで、理解できたとのことである。

以上の誘いという行為をすることによる、相手への負担に対する日本人とタイ人との価値観の違いによってコミュニケーション上誤解が生じる恐れがあるということが言える。

#### ④ ヘノートの依頼

「ここはタイの大学です。高子さんがこの大学に留学しています。タイに来て一年になりましたが、まだまだタイ語で授業を受けるのが大変です。今日は日本に留学していた経験があり、同じ授業をとっているタイ人学生と会って話をしました。」

高子 … もうすぐ試験ですよ。

シュー … そうですね。

高子 … 勉強、すすんでいますか。

シュー … まだこれからです。

高子 … タイ語で授業を受けるのは大変ですよ。

シュー … 私もやっぱり日本では大変でしたね。

高子 … でも、私はタイ語が下手だから。

シュー … いやいや、上手ですよ。

高子 … テキストはどうか読めても全然ノートがとれなくて。

シュー … それは大変ですね。

高子 … それで、できれば……。

シュー …

★ 線を引いた高子さんの言った言葉をあなたがシューさん

だとしたらどのように答えますか。

A、大丈夫ですよ、高子さんなら。がんばって下さい。

B、じゃあ、試験が終わったらタイ語の勉強をしましょうか。

C、じゃ、私のノートを貸しましょうか。

D、その他

以上の会話において、シューと高子の発言を追っていくと、発話者である高子がタイ語で授業をうけるのが大変だ、タイ語が下手だ、また、テキストが読めても全然ノートが取れないなどの不満を陳述した後、「それで、できれば……」というふうな途中で中断して、一つの可能性を条件とする形で相手に対する願望を表そうとしている。

聞き手であるシューは、下線部の「それで、できれば……」の後半を推測することができない場合、その発言の前の部分から話し手である高子の意図を判断することになる。そうすると、高子を励ましたり、高子のタイ語の勉強を手伝ったりするような対応が考えられるが、そうした場合、高子は、「ノートを貸してくれればいいのに、シューさんはケチだ」、あるいは、ノートを貸してもらえなくてがっかりするのではないだろうか。

友達が試験の前にノートが全然取れなかったと言ったら、それはノートを借りたいという意図を示していると日本人同士ならば、なんとなく理解し、さらに、よっぽど嫌いな人ではなければノートを貸すだろう。高子は単に、タイ語で授業を受けるのが大変だ、タイ語が下手だ、また、ノートが取れないということを陳述しているというよりも、そう言った状況で、私は今大変なんだ、ノートを貸してほしいという願望や依頼の意図を

間接的に伝えていると読み取ることができる。つまり、発話者は自分の状況を報告し、また、一つの可能性を条件の形式を使用することによって、願望または依頼をしているのである。

表④ アンケートの各選択肢の回答%

		A
		B
		【C】
		D
グループ 2	34%	25%
グループ 1	25%	12%
	38%	55%
	3%	8%

表④に見られるように、グループ1もグループ2も高子の意図を理解することができれば、選択するであろうCを最も多く選択している。ここで考えられるのは、以上の会話のような場面においては、日本・タイの共通の理解に結びつくヒントがあることである。これについて、インタビュウの結果を見ると、傍線部の後半部の発話だけを見ても、何が言いたいのかわからなかったという意見、また、タイ人はノートを借りるのにこのような遠回しな言い方をしないし、中止法の形で止めて最後まで言わないという表現形式をとらないので、発話者の意図がわからなかったが、傍線部の前半部にノートがとれないことを言っているの、なんとなくわかったという意見があった。タイ人も依頼する時、依頼する前に、困った状況や理由を前置きとして述べてから、親しい人なら依頼の直接的表現を、また、自分より立場が上の人なら依頼の間接的表現を使用して、依頼

する。従って、以上の会話でも、ノートのことを言ったことがヒントになって、発話者はノートを貸してほしいのではないかとわかったということになる。また、このような依頼の場面にいくわしたことがあるので、なんとなくわかったという人もいた。

しかし、グループ1ではCの割合は55%であるが、グループ2では、38%選択されている。これは差が2倍というほどではないが、かなり差がある。また、グループ2では、AとBをあわせて、50%以上選択しているのは、「タイ語で授業を受けるのは大変です。」「タイ語が下手です。」という高子が発言をすることによって自分の心の中の試験に対する不安を述べたと文字通りに解釈したため、Aの「大丈夫ですよ、高子さんなら。頑張つて下さい。」と励ましたり、Bの「じゃあ、試験が終わつたらタイ語の勉強をしましょうか」という勉強を手伝おうという表現を選んでしまうのである。

以上のことから、方略の面については、日本人もタイ人もノートがとれない理由を述べてから、ノートを貸してほしいという依頼文を使用するが、下線部の「できれば……」という表現形式が異文化コミュニケーションの場合、障害となっている。

#### ⑤ 〈意見の反対〉

「ただいま、K大学は学園祭の準備中です。アジア文化研究サークルの学生たちがタイ料理のお店を出すことにしました。去年もお店を出した先輩の林さんと今年サークルに入ったばかりの山田さんが話をしています。」  
山田…メニューは何品にしましょうか。

林 … 今のところ 四種類だけど、これで十分だと思っよ。  
山田 … どうでしょう。タイで食べたデザートもおいしかったですよ。

林 … そうかなあ、でもね、これ以上増えると大変だよ。  
山田 … みんなよろこんで食べると思いますよ。

林 … なるほどねえ。君の気持ちはよく分かるけど…  
山田 …

★ 線を引いた林さんの言った言葉をあなたが山田さんだとしたら、どのように理解しますか。

A、林さんはデザートを加えることに賛成してくれている。

B、林さんはデザートを加えることに反対である。

C、林さんはまだ考えをはっきり決めていない。

D、その他

以上の会話では、文字通りに発言を追っていくと、山田が自分がタイで食べたデザートをメニューに入れたいと思い、先輩である林を説得しようとして、そのタイのデザートを楽しんで食べると思うという意見を出したという展開になっている。そうすると、林は「なるほどねえ」という理解したという簡単な相づちを打った後、山田の気持ちはよく分かると発言した。

ここで、聞き手である山田が、林の「君の気持ちはよく分かるけど…」の発言を文字通りに解釈した場合、その後、勝手にデザートメニューに入れるなどのような行動をとれば、発話者である林は「山田さんは話の分からない人だ、物事を理解しようとしていない人だ」と思ってしまうのではないだろうか。

確かに、「君の気持ちはよく分かる。」の一文だけで、特定の文脈や場面が与えられなかったとしたら、この一文における「分かる」という言葉は相手の言うことを理解してそれを受け入れるという発話者の意志を伝える機能を持つことになる。しかし、「君の気持ちはよく分かるけど…」の文では、文末に「けど」が置かれており、実質的な反論を示す意味が付け加えられている。さらに、この発言に使われている「君の気持ちは」の「は」については、水谷修氏の次のような指摘がある。係助詞「は」は「対比」の「は」であって、「分かる」と共起した時、この後に反対の内容が来ることが予測できる(水谷修、一九八三<sup>5</sup>)。従って、ここでは賛成しているというより、反対しているという意図を間接的に伝えていると読み取ることができる。つまり、発話者は陳述することによって、反対をしているのである。

表⑤ アンケートの各選択肢の回答%

		A
グループ1	8%	【B】
グループ2	35%	C
	35%	D
	30%	
	0%	

ここではつきり見られるのは、日本在住経験のあるグループ1と日本在住経験のないグループ2との(何らかの条件によつての)理解力の違いである。Aを選んだグループには「けど」の理解力の問題があると考えられる。逆説の予測を働かせるも

のには「でも、だが」などもあるが、どれも「君の気持ちはよく分かる」と一緒に使おうと、一応相手の発言に対して、意見を認めているが、相手を傷つけないように間接的に反対のことを伝えるという日本人的なコミュニケーションの機能を働かせるものである。

タイ人は、傍線部の発話を使用して、人の意見に反対することとはしないが、グループ1のBの選択率が高いということには、理解のためのヒントが何かあるはずである。インタビュアによると、日本人が文末に「けど、けれども、が」などを使うと、言ったことがまだ終わっていない、前半の内容と反対の内容を隠している」と理解し、傍線部の発言においても反対の意味が隠れているのではないかと思つて、Bを選んだというのである。

一方、グループ2において、A、B、Cの選択率が同じぐらいに分かれていますことから考えられるのは、文字通りの解釈と母語の影響の結果であると言える。インタビュアによると、傍線部の発言をタイ語で発話する場合、タイ人は文字通りに解釈し、また、傍線部の発言に込められている反対の意図を伝えたい場合、「気持ちがかかる」という表現をとらないで、反対する理由を述べるという表現手法を使い、それによつて、反対の意図を間接的に伝えるというのである。

以上のことから、タイと日本の異文化コミュニケーションの場を考える場合、日本語の文末の「けど……」を使った表現形式をタイ人が理解できても、反対の意見を述べる時、日本人とタイ人の間で、表現手法が違うために発言の反対の意図が理解できず、誤解が生じることが考えられる。

#### ⑥ (⑤の) 林の発言に対応する発言

▲ 上で見た理解をふまえて、 のところで山田さんはメニューにデザートを加えるようにもう一度相手に伝えようとしています。あなたが山田さんだとしたら、どのように言うと思いますか。

A、じゃあ、もうちよつと考えさせて下さい。

B、そうですね。デザートを加えたほうがいいですよ。

C、今すぐに決める必要はないでしょう。

D、その他

この設定は⑤の会話場面を理解した上で山田さんはメニューにデザートを加えるように林さんにとの適切に対応・表現すればよいかということの問題にしている。以上の会話場面において、後輩である山田が先輩である林にAの「じゃあ、もうちよつと考えさせて下さい」と発話し、これを文字通りに解釈すると、お願いする形をとつて肯定でも否定でもない、結論を出そうとしない態度を示すことによつて、間接的に聞き手である林の気持ちを認めない意図が込められている。

Bでは、「……たほうがいい」という忠告を表す表現形式をとつて、さらに「自分の判断などを聞き手に主張したり念を押したり押し付けたりする」(『日本語教育辞典』、四一五頁)の「よ」を文末に使用することによつて、かなり直接的に自分(山田)の意見を示している。

Cの「今すぐに決める必要はないでしょう」の発話では、後輩から先輩に発話する言い方としては失礼な印象を受ける。つまり、メニューを何品にするかという決定権を持っている先輩

の林の後輩の山田に対する発話ならば成り立つが、後輩の山田から先輩の林に対する発話としては不自然であるということである。

表⑥ アンケートの各選択肢の回答%

		【A】
グループ 1	26%	B
	6%	C
	50%	D
グループ 2	23%	
	10%	
	57%	
	10%	

この選択の割合をふまえて、はつきり分かることは、Aの「じゃあ、もうちょっと考えさせて下さい」に相手の発言を認めないという意図が込められているということの理解に問題があるということである。つまり、この会話場面においてはタイ人がAと同じような発言を聞いてそれを受け止める場合、文字通りの意味以外の意図が込められていると判断するよりも文字通りに判断する。また、もう一つ考えられることは母語での表現手法の影響が両グループともにあることである。つまり、タイ語では、特に林が先輩であるということもあり、日本語と同じように直接的に主張することもしないが、Aの「もうちょっと考えさせて下さい」のようにも言わないので、アンケート中の「意見」の欄によると、Cの「今すぐに決める必要はないでしょう。」のように言うか、あるいは、他のメンバーに聞いてみるか、または、デザートを加えるようにすすめるために、他の

有効な理由を言う、などというものがあつた。さらに、両グループともAを除いて、BよりもCを選択した割合が高いというのは、この場面、状況ではタイ語でも直接的には言わないことが分かつた。

⑦ へ申し出の断り

「ノーイさんは日本にやってきたタイ人の留学生です。ノーイさんにはいろいろと親切に勉強の面倒を見てくれる日本人の学生のクラスメイトがいますが、大変でも自分一人の力で勉強したいと思っています。」

日本人の学生… 今日の授業はどうでしたか。わかりにくくなかつたですか。

ノーイ … ええ、まあ、いくつかわかりにくいところがありました。

日本人の学生… じゃあ一緒に復習しましょう。

ノーイ … はあ……

日本人の学生… この授業は難しそうだから毎週決まった日に勉強会をしましょうか。

ノーイ …

★ ノーイさんは今日こそはこの申し出を断ろうと思つています。あなたがノーイさんだとしたら、どのように言いますか。

A、心配しないで下さい。一人で大丈夫ですから。

B、ご親切にありがとうございます。でも、お忙しいでしようか？ C、ありがたいけれども、えんりよします。ご迷惑でしようから。

D、その他

この設定も前問と同様、上記の会話を理解した上で適切に表現できるかどうかを見るものとなっている。選択肢Aでは、相手（日本人学生）に心配をかけないように否定依頼文の形式をとって、発言した後、自分が一人で大丈夫であるという状況を報告することによって、間接的にその申し出を断る意図がこめられている。

Bでは、まず、その申し出にお礼を言っ、そして、「お忙しいでしょうか？」という相手の状況を推測した質問の形をとって、間接的に「親切な申し出をありがとうございます、あなたは忙しいだろうから、遠慮して断ります。」のようなメッセージ（意図）がこめられている。

Cでは、まず、相手にお礼を言っ、遠慮するという自分の気持ちを陳述し、さらに、遠慮する気持ちになる理由（断る理由）を陳述することによって、間接的にその申し出を断る意図がこめられている。

以上の選択肢の発言はどれも間違っていないが、以上の会話・場面において、ノイーさんがAとCの発言を選択して、実際に発言をしたら、聞き手である日本人学生はどう受け止めるのだろうか。Aの「心配しないでください。一人で大丈夫ですから。」とCの「ありがたいけれども、えんりよします。ご迷惑でしょうから。」はそれぞれ丁寧な言い方であるけれども、断りの意図をかなり明確に表している。

Aでは、「一人で大丈夫ですから。」という自分の状況を述べることによって、聞き手である日本人学生は「よそよそしくて、親近感がない、人の厚意を軽く見る」など話し手に対するマイ

ナスの印象をもつのではないだろうか。

Cでは、「えんりよします。」という自分の意志を表示している。これだけでも直接的な感じがするが、さらに、「ご迷惑でしょうから」という表現形式が相手の気持ちにまで踏み込んだ断定的な表現になっている。また、理由の部分を示す「から」が、前に言葉で述べられている事柄に対して、その直接の原因・理由を積極的に示す場合にしか用いられない（『日本語教育事典』、四三三頁）という機能から、「ご迷惑でしょうから」という発言は、相手に対して直接的な印象を与える。「ご迷惑でしょう」という発言がよく使われる場面がある。例えば、「ご迷惑でしょうが、ちょっと手伝っていただけませんか」などのように人に依頼する時である。しかし、この会話場面で使用されると、相手の積極的な意志を疑っており、相手の厚意を無にするというニュアンスが込められることになる。従って、Cの発言を使っ、断る場合、聞き手である日本人学生は「相手（ノイー）が自分の申し出に対して、余計なお世話だ、ありがた迷惑だと思っているんだな」と思うのではないだろうか。

表① アンケートの各選択肢の回答%

		A
グループ1	18%	【B】
グループ2	5%	C
	8%	D
	85%	
	2%	

表⑦に見られるように、日本人学生の申し出に適切に対応・

表現する場合、Bを選択することになるであろうが、グループ

1もグループ2も最も多く選択したのはBではなく、Cである。

ここでは、母語の発話の表現手法の影響がはつきり見られる。

インタビュアーでタイ語でもCと同じように言うかということに

ついて聞いたら、ほとんどの人が同じように言うかと答えた。従っ

て、ここで言えるのは、タイ語では、以上の場面・状況におい

て、Cと同じような発話をよく使用するということである。イ

ンタビュアーの意見で他に多かつたのは、Aと同じように言い、

または、安心させるために、「大丈夫です。自分で頑張ってみま

す。もし分からなかったら質問します」というように自分の状

況を陳述することによって、断りのメッセージ(意図)を間接

的に伝えるという表現手法である。また、Bの割合を見てみる

と、グループ2では、たった8%である一方、グループ1では、

37%と5倍近い割合で多く選択されている。ここでは、日本在

住経験の有無の影響が大きいと考えられる。

以上のことから、タイ語では、AとCの発話は、相手の申し

出に対する丁寧な表現として使用されているのに対して、日本

語では、同じAとCの発話であるが、相手に対して直接的な、

マイナスの印象がこめられているという表現と理解しているこ

とが分かる。つまり、異文化コミュニケーションの場を考える

場合、タイ人が失礼がないように、丁寧に断るとい意図のもの

とに、AとCを発言したとしても聞き手である日本人は失礼だ、

よそよそしいという印象を受けるのである。このように表現に

込められているニュアンスの違いのため、異文化コミュニケーション

ションの場では、誤解や人間関係の摩擦がしばしば生じる。

## 5 結論

5・1 間接的発話行為はどうして存在するのか。

間接的発話行為が存在する一つの理由は丁寧さを表すため

である。丁寧な話し方にはいろいろあるだろう。敬語や決り文句

などのフォーマリティーの度合いの高い言葉を使うのも丁寧な

話し方であるが、②のように相手の意志に応じることができな

い場合、「考えさせて下さい」と言って、相手を傷つけるような

拒否の言葉を使わず、間接的にそれとなく相手に気づかせたり、

④のような依頼の場合、相手に負担をかけるようなことを言わ

ずに、「できれば…」というふうに途中で中断して、はつきりと

した依頼の形を避け、相手に引き受けるか、断るかの選択を気

持ちの上で容易にさせたりするのも丁寧さを表す話し方であ

る。

本稿で対象としている間接的発話行為は、どちらかという

敬語表現のような特定の言語形式を使うものよりも、相手を気

遣うことによって丁寧な態度を示す間接的発話行為である。

我々の日常生活では、相手の利益になることや、相手が喜び

そうなることは直接的発話行為でいくらでも言えるが、相手に

とって不利益、不快になることは同じようにいつでも生じ得る

のにもかわからず、発話する際の表現手法や表現形式を考えな

ければ、相手に対して失礼や迷惑になってしまう。コミュニケー

ション活動を遂行する場合、相手を傷つけないよう、相手に負

担をかけぬよう、自分が相手にとって喜ばしい存在であるよう

にするために間接的発話行為が存在するのである。

## 5・2 間接的発話行為における言語的な特徴・相違点

間接的発話行為における発話者の意図を把握する手がかりとして、4の間接的発話行為を考察した上で、以下のように分類できる。

### I・語や句の添加のグループ

場面に応じて、様々にその機能や意味を変える終助詞や副詞が間接的発話行為の文に加わっていることが発話内容の直接性を緩和する役割を果たすのはこのグループに属する。4の会話からは①の女性の後半部の発話の文末の「かな…」であるが、このような聞き手をしっかりと意識してのひとりごととは先客のいる公衆電話のそばで「早く終わってくれないかなあ」などと言う場合と同じように、自分の願望や要求を間接的に伝えるひとりごとである。

そして、②の「ちよつと考えさせて下さい」の「ちよつと」、③の「一応出品させてもらっている」の「一応」もこのグループに属している。つまり、数量や程度が少しという意味の「ちよつと」と、とりあえずという意味の「一応」はこれらの後に続く「考えさせて下さい」や「出品させてもらっている」という発話者自身に関する行為に対して聞き手が感じる負担を軽減させるという、発話内容の直接性を緩和する役割を果たしているのである。

また、③「大したことじゃないけど…」などのような「減量化式」の前置きを添加することによって以下の主文を強く響かせない働きをする。

## II・文の中断のグループ

文を完結させず、③の「わざわざ出かけてきてもらうほどのものじゃないんだけど…」④の「できれば…」⑤の「君の気持ちはよく分かるけど…」など、文を途中で中断して、後半部を最後まで述べないという表現形式はこのグループに属している。しかし、タイ人には「言わねば分からぬ」という言語観を持っているので文を途中で中断して、最後まで言わないという方法を使って、誘ったり依頼したり拒否したりはしない。また、このような方法をとると理解に問題を生ずることが多い。例えば、④のノートの依頼の場合、インタビュアの時もあげられた意見であるが、タイ人も依頼する時、最初に困った状況や理由を述べた後、日本語のようにそのまま中断しないで、そのあと依頼の内容を伝えるのである。

このように中断法を使うか使わないかの言語習慣の違いもあるが、日本語の間接的発話行為を考察してみると、全体的にタイ語の間接的発話行為のほうが日本語のそれより、直接的な感じがするということが言える。

### III・表現の慣用化のグループ

直接的な表現を避けて、表現を変えてやわらかく、特に人間関係に緊張を与える可能性が高い拒否、反対、否定の意図を示す場合に使う慣用的な表現による間接的発話行為はこのグループに属する。例えば、②の「考えさせて下さい」と⑤の「君の気持ちはよく分かる」がそうである。

このグループの表現は、文字通りの解釈は求められておらず、文脈や場面に対応した半ば慣用句化した表現の機能の理解、つ

まり、間接的発話行為としての意味（発話者の意図）の誤解を生じさせないための理解が求められる。故に、発話に間接性を働かせている特定の文脈や場面を適切に理解する必要がある。

### 5・3 間接的発話行為における社会・文化背景や価値観

5・3・1 水谷修氏は、「日本人がことばの形に依存して相手に伝えるという方法を好まない、それは相手への思いやりということがあると考えられる」（水谷修、一九八三）という。つまり、相手に負担をかけたり、相手を傷つけたりすることについては言葉で全部を言い表さないで、発話意図を理解するためのヒントになる表現を通して伝えて相手への思いやりを示すということである。このような言語観は日本語の間接的発話行為によく表れている。5・2のIIIでみたグループからは、相手の意志に依ることができない場合、例えば、相手の申し出を拒否する時、或いは、相手の意見に反対する時、しかし自分の事情としてはそれを伝えなければならないのだが、対人関係や社会的常識を考えると、拒否、反対がしにくい状況であるために、表現を変えて工夫する。その工夫は例えば、相手を傷つけないように、「君の気持ちはよく分かるけど」という一応相手の発言に対して、意見を認めているという態度をとって間接的に反対の意図を伝える工夫や、依頼に対する断りという拒否の場合は、はっきり断らず、「ちよつと考えさせて下さい」といって、その場での決定を延期するという表現手法をとる工夫である。また、5・2のIIのグループからは、例えば依頼など相手に負担をかける場合、「できれば…」といって、文を完結させず、途中で中断し、最後まで言わないということによって、相手に引き受け

るか、断るかの選択を気持ちの上で容易にさせるといふ工夫が見られる。これらの表現手法・形式は相手を思いやるという日本人の言語観に基づいて工夫されたものであると言える。

では、タイ語の慣用句に「bua may hay chain nam may hay thun」というのがある。（沼で魚をとるには）蓮をいためないように、水を濁さないように気をつけるという意味である。つまり、何か行動をする際には、周囲のことに気を配らなければならないという意味である。タイ人の表現手法・形式にもこの慣用句の教えが表れている。タイ人も日本人と同じように、相手を傷つけたり、相手に負担をかけたりするような場合、直接的な発話避け、なるべく間接的に伝えるのである。

5・3・2 日本社会において自分に関するものについては低めて言い、相手に属するものについては高めて言うというのが美德とされている。このような習慣は日本文化の一端として捉えることができ、間接的発話行為として日本語の謙讓表現によく表れている。例えば、③の展覧会の誘いの場合、実際は今回の展覧会に自分も出品することに誇りを持っていて、友達にぜひ来てほしいと思っても自分が出品する展覧会がそんなにいいものではないと、低めて言う。これは基本的には相手に迷惑をかけまいとする考え方に基づいているものであると言える。つまり、人を誘うことは、自分のために相手に時間を割かせることと考える。それに対して、タイ人は日本人のように事実（自分が持っている考え）と異なることを発言してまで自分を低めることはしない。また、この程度の誘いであれば、相手に時間を割かせるという負担を感じない。従って、本来に来て

ほしければ、「もし暇なら、見に来ませんか」など日本人より比較的直接的に誘う。

5・3・3 日本では女性は結婚したら、仕事を辞めて、家庭に入り、子供を産んで家を守るという一般的な考え方や習慣がある。①の相手からのプロポーズを促す発言に以上の考え方や習慣がよく表れている。これに対して、タイの中流家庭の多くは共働きでないと生活できないという経済的な問題をかかえており、ほとんどの女性が結婚しても仕事をつづけるので、仕事のことを理由に結婚を促すことはしない。よって、この場合の発言も日本人ほど間接的ではないのである。

#### 5・4 結び

以上、間接的発話行為における社会的背景や文化的前提の特徴、相違点を見てきたが、両国の言語の背景にある社会・文化・価値観の違いが双方の表現形式や表現手法に大きく影響しており、タイ人が話す日本語においてタイ人がしてしまう誤解の大きな原因となっているということが分かった。表現手法が共通していれば、誤解の生じる確率は低いが、表現手法の相違が大きいと問題の生じる確率が上がる。

間接的発話行為における発話者の意図を適切に理解し、また、それぞれの場面・状況において、適切に対応・表現するには、日本語あるいはタイ語の言語能力以上のものが要求される。まず、それぞれの会話場面を理解することが必要であり、会話場面をとりまく状況を把握する上で、その背後にある文化的前提や価値観を理解し、さらに、その文化的前提や背景に基づいて成立している会社組織や対人関係における社会的ルールに適合

して適切な表現を使う能力が必要となる。

これらの条件を身につけていなければ、間接的発話行為を文字通りに解釈し、母語での表現手法やその背景にある文化的前提をそのまま日本語あるいはタイ語に転移(transfer)して誤解が生じる。さらに、その誤解は様々に複雑になる可能性をはらんでいる。会話の場で話されている言語は常に一方にとっては母語であり、他方にとっては外国語である。外国語として会話する側にとっては発話者になっても聞き手になっても常に先述の転移がおこる。母語として会話をする方にも聞き手になった場合、相手の発話の転移の現象に気づかず自分の母語の表現手法や文化的前提を期待して、誤解が生じる。

このような誤解が生じないようにお互いがお互いの違う文化・価値観の存在を認識し、相手の違いを認めることができれば、相手を誤解したり、怒ったりしなくて済む。このことが最も大切である。

また、学習者のコミュニケーション能力を育成するには、単に発音、文法や表現形式を教えれば充分なわけではなく、それぞれの場面・状況を把握する上で、それらの背景にある表現手法や、文化・習慣・価値観などをも含めて教えることが必要である。

#### 注

- (一) Seattle, J.R. (1975), "Indirect Speech Acts", in P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax And Semantics Vol.3: Speech Acts* New York:Academic Press.

(2) Austin, J.L. (1962). How to do things with words. London: Oxford University Press.

Austin は「この発話行為を三段階に分けている。

諸 i、発語行為 (locutionary act)

拍 ii、発語内行為 (illocutionary act)

縮 iii、発語媒介行為 (perlocutionary act)

山梨正明氏 (一九八六) の説明によると、また、iii の発語媒介行為は、「この発語内行為を介し、何かを言うことにより (by saying something) 何らかの発話の効力をその結果として生み出す行為をなす。

(山梨正明 (一九八六)、『発話行為』大修館書店)。

(3) 水谷修 (一九七九)、『話しことばと日本人—日本語の生態—』創拓社。

(4) 前出 (注3) の論文と同じ。

(5) 水谷修編 (一九八三)、『講座日本語表現3 『話しことばの表現』』筑摩書房。

(6) 前出 (注5) の論文と同じ。

(スニサーウィッターヤーパンヤーノン・慶應義塾大学大学院生)